
月神

apple

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月神

【Nコード】

N3649V

【作者名】

apple

【あらすじ】

「ゲームだよゲーム。人間を使った簡単なゲーム。ほら、例えば貴方の仲の良い親友がいじめの標的になったとしたらどうするか…みたいな感じのやつ。あ、別に例えだから真に受けないでね？私はそうゆうゲームが大好きなんだけど…、どうかな？だーいじょうぶ、簡単な話だよ。友達の背中をすこーし押してやるだけのことだからさ」

空架奏…そこには様々な人間が多様な思いを抱き、すれ違う。

月神という存在、便利屋に依頼に来たという無知な少女、悪魔のよ

うな女、人を喰らう情報屋、血に塗れた笑顔の少女、存在意義を無くした双子、過去を引きずる少年、そして…月神の名を名乗る便利屋の少女。

それぞれの過去が混ざり合い、連鎖していく……。…。

プロローグ「月神」

「月神^{つきがみ}って一体なんですか？」

金髪の少女は問う。

「月神ね……。まあ、簡単に言うなら神様かしら」

携帯電話をいじりながら興味の無さそうな顔でもう一人の女は言う。

そして思い出したかのように、

「月神って言葉は一般人に言っちゃだめよ。面倒だから」

「？」

少女は意味が分からず首を傾^{かし}げるが、女はそんな少女を見て悪魔のような笑みを浮かべた。

「月神ってさ、神様って言えば神様なんだけど、悪魔って言えば悪魔なのよね」

「えっ…と、よく意味が……」

女は近くにあるコップの水を飲み干し、楽しそうに楽しそうに話を続ける。

「幸運と不幸を運ぶのよ。決して皆が思うような神じゃなくて、そう！悪魔に取り憑かれた神様みたいな感じ！」

一瞬少女は背中にゾッとするような何かが蠢いたことに気付いた。

「ここだけの話し、月神にはこーゆう噂があるんだけどね」

「ウワサ……？」

女はコップいっぱいに入っていた氷を噛み砕き、しばらくの間をあけ、にんまりと笑った。

——幸運をもたらす月の神……

後に不可解な事件がおこる——

「幸運の災い」
わざわ

古くからの伝説…

月神
つきがみ

出会いと裏切り

—— P M 1 8 : : 3 2 : : 0 5 …… 空架奏 ——

人通りの少ない道は月明かりに照らされ、怪しい雰囲気醸し出す。
—— あの人の言うとおり、本当にあるなんて……。

そこには金髪の少女・神月紅が空架奏という街に、一人佇んでいた。
「やっと見つけました」

袖で汗を拭い、そして無邪気な笑顔で言い放つ。

「ここが、便利屋……!!」

*

同時刻 街外れの廃墟

「大丈夫かなあ、あの子」

暗闇の中で一人の少女が呟く。

「んー、大丈夫でしょ。まあ、何かあったら玲ちゃんに頼むし」

興味がないのか、女は話し手の少女に目も合わせず答える。

「ちがうよー、そうじゃなくって。あたしが心配してるのは、あの子がもしも感化されちゃったりしたら玲ちゃんがちゃんあんとドロドロの血塗れに仕上げてくれるのになって話ー」

言い方には少し幼さが残るが、それとは正反対に明らかに危ない言葉^レを吐き捨てる。

それに対し、女は呆れ半分で

「相変わらずのグロ女ね。少しはまともな考えを持てないのかしら、杏奈ちゃん」

「あはは 無理無理、だってこれがあたしの生き甲斐なんだからー」
杏奈と呼ばれた少女の手にはナイフが握られており、それを見た女は腰から銃を抜き取り――

「その生き甲斐、今すぐなくしてあげる」

ダンッ……!!

長い髪をなびかせながら勢い良く床を蹴った。

*

空架奏 便利屋前

「——って、どうしよう。普通に入った方が怪しくないよね？でもいきなり“依頼に来ました”は変っていうか…」

溜め息を4回ほど吐き、ドアの取っ手に手をかけると…

ぎい

「っ!？」

ドアの開く音に驚きながら目を向けると、黒く長い髪の少女がじつと紅を見つめていた。

顔つきからすればまだ幼さが残っているが、凛々しく、少女の姿があまりにも堂に入っているため、その様子を眺めていた紅は黒髪の少女に見入ってしまった。

——綺麗な人…って、見る場合じゃなくて!!

「あ、えつと…、こんばんは」

必死に愛想笑で通そうとしたのがバレたのか、黒髪の少女はこちらに向かって歩いてくる。

「あつ、こ、ここ、便利屋て会社？会社じゃないですよ、えと、家？ええとその…」

自分でも何を言ってるのか分からなくなり混乱していると、黒髪の少女が紅の手を取った。

「依頼だよな？中で話してくれ」

「…え？は、はい」

——え！？唐突過ぎて何が起こってるのかまだ把握できてない…!!

そんな紅の思いが分かるはずもなく、黒髪の少女は紅を中に案内した。

「おじゃまします…」

中には女2人男2人、計4人が椅子に座って各々違うことをしていた。

「久しぶりのお客さんーっ！」

手前に座っていた水色の髪の少女は、目を輝かせながら口いっぱいに大福を詰め込んでいた。

「…名前は？」

タイヤキを銜えながら目つきの悪い少年が問う。紅はビクビクしながら「えと、神月紅です…」と小さい声で呟くように言った。

一通り話が終えた所を確認すると、資料を読んでいた黒髪の少女は「ふむ」と一人で納得し、紅に問いかける。

「そろそろ依頼内容を教えてもらってもいいか？」

紅の体が一瞬びくつと震え、口をぱくぱくと僅かに動かしてから、まるで覚悟を決めたかのように――

「私を…私を助けてください」

*

ぎいいいいいんツ!!!!!!

金属同士がこすり合う音が響き渡る。

「…あら」

「おりよ?」

杏奈と女の間に割って入ってきたのは両手に刀を持った少年だった。

「やめてくださいよー、女性同士で争うなんて危ないなあ。」

「ここに来るなんて珍しいわね」

刃を不気味に輝かせながら少年はカラカラと笑い、

「俺はいつだって女性のいるところにはいますよつと。」

女をからかいながら少年は刀をしまい、一枚の写真を取り出した。

「湊くんは相変わらずあの子が好きなんだねえ」

湊と呼ばれた少年は、ニイと笑ってから

「いや、俺は一人の女じゃなくて世界中の女が平等に好きなわけで、あの子が一途に好きなわけでもねえよ」

「つまり、単なる変態でしょ」

「ちよつとちよつと!!!え?その言い方ひどくない?…まあ、でも俺はそんな言葉も全部受け入れ———」

言いかけた瞬間、湊に向かって回し蹴りが放たれた。

それを紙一重で避けつつ、湊は話を続ける。

「人が話してる最中に回し蹴りとか…。怖いなあ。あ、そうだそうだが、こんな事をするためにわざわざ来たんじゃないやなくて、伝えなきゃいけないことがあったんスよ」

明るい少年とは裏腹に、女は目を細め「銃でも撃つとけばよかった」とため息混じりに危ない言葉を吐き捨てた。

「…危ない発言は慎んでください。で、伝えなきゃいけないことな
んですけど…、とりあえず場所を変えましょうか。おっと、杏奈は
席外してくれる？」

*

数分間の間が空いた後、目つきの悪い少年が口を開く。

「理由は？」

紅が黙り込むと、そんな様子を見た黒髪の少女は席を立ち、

「…無理して言わなくていい。言いたいときに言ってくれ」

それから黒髪の少女は立ち上がり、コートを靡かせながら紅に向か
って言う。

「私の名は月神唯だ」

それに続いて、目を大きく見開いた水色髪の少女が紅の足の爪先か
ら頭のとっぺんまでゆっくりと睨めあげ、ニイと笑みを浮かべ、口
を開いた。

「私の名前は神崎まいだよーん 趣味は食べること・マイブームも
食べること・特技は早食い・よろしくね!!」

「食うことばっかだな。他にないのかよ」

目つきの悪い黒髪の少年が溜め息混じりに呟く。

「この怖そうな黒髪ボーイは東谷隼人だよー（笑）」とまいがから

かうと、黒髪の少年・隼人は「勝手に人の紹介すんな！！それと（笑）とかいらねえよ！！」と言いながら頬を引きつらせていた。
「まあまあ…。えーっと、紅ちゃん？俺は鈴風総悟、よろしくね」
二人をたしなめながら笑顔で紅に話しかける総悟に対し、お盆を持った少女が紅に近づく。

「リリー・トレインよ。よろしくね」

金髪の三つ編み少女・リリーが軽く自己紹介を済ませ、紅の傍に紅茶を差し出した。

「…あ、ありがとうございます」

あわあわとしつつ紅茶を飲む紅の様子を見ながら、唯は笑みを浮かべ、

「神月紅」

「は…、はい」

「ようこそ、便利屋へ」

*

1時間後 便利屋2F・205号室

冷たい風が吹く中、一人物憂げに佇む少女がいた。

——悪い人には見えなかったなあ……。

『PPPPPP』

考え事をしている最中、携帯から着信音が響き渡った。

紅は携帯を手にとると、すぐさま通話ボタンを押し、「もしもと問いかける。

聞こえてきたのは……、

『もしもしー、紅ちゃん？調子どう？元気にやってるー？』

女の声。

今一番聞きたくなかった女の声が脳内に響き渡る。

「……魅嘉さん」

紅が相手の名前を呟くと、女……星奈魅嘉が電話口で笑いながら話し始めた。

『いやあ、正直心配だったのよ。もし紅ちゃんが「全然悪い人に見えない」とか「この人達がどうして悪いのか良く分からない」とか変な情があつたりでもしたらどうしようかなーって』

「魅嘉さっ……」

『でも心配いらないわよね？だってたった数時間でそこまで感化されちゃうなんて殺し屋としてはまず不合格だし、その程度で同情とかしてるならこれからの仕事にも支障が出ちゃうからね。紅ちゃんにはみーんな期待してるわけだから、その期待を心優しい紅ちゃんが裏切る分けないよね。まあ、色んな意味ではそんな期待を裏切る紅ちゃんも見てみたいところだけど』

「……。」

黙り込む紅を余所に、魅嘉は楽しそうに話しを続ける。

『まあ冗談は程々にして。で、仕事は順調？本当に感化されちゃってるわけじゃないわよね？』

「……。」

『分かってるでしょ？敵に同情するなんて甘ったれた考えは、現代社会には通用しないってこと』

「…分かってますよ、私には」

「私には、友達とか仲間とか…必要ありませんから」

悲しみと怒りの入り混じった一言。数秒の間が空き、魅嘉は機嫌の良さそうな口調で、

『そうね、一瞬心配したあたしが馬鹿だったわ。じゃあ、仕事は明日までに終わらせておいてね』

ブツッ

電話が切られてから数分間、紅は立ち尽くしたままだった。

「とも…だち……」

呟いた言葉は夜の街の中に溶け込み、消えていった。

*

同時刻 高級マンション最上階

月明かりの中、一人の女は携帯を眺めながら笑っていた。

「あははっ、ほんっとーに面白いなあ。台本どおりに動いてくれて嬉しいわ」

星奈魅嘉は、にんまりと笑ってからくりと一回転し、空を見上げた。

「あなたもそう思うでしょ？…月神」

『PPPP』

片手に持っていた携帯が鳴り響く。

「はい、もしもし？」

『魅嘉様、今から向かって宜しいのでしょうか？』

相手からはまだ中学生くらいの少女の声が聴こえた。

「ああ、玲ちゃん？えーっとね、今はまだいいや。明日の朝あたりにあいつらも気づくと思うから、朝に行ってもらっていい？」

『了解しました。では』

玲と呼ばれる少女は、指示を聞くと電話を切った。

「さて」

魅嘉はくりりと方向転換すると、歩を進め始める。

「楽しみだなあ。…でも」

携帯をポケットにしまうと、目を細めたまま息を吐き出した。

そしてもうひとつの携帯を取り出し、画面に表示された一件のメールを見ながら、先程とは矛盾した言葉を呟く。

「計画が狂ったわ。うまくいけばいいけど」

*

AM07:11:02 便利屋1F 客間

ギッ

「起きてたのか、神月」

「……。」

先日とは違った雰囲気の紅に気づき、

「…まあ、他のメンバーは出かけてる最中だし、ゆっくり話でも聞こうか？」

唯は椅子に腰掛けることを勧めた。

「すみません、唯さん」

申し訳なさそうに頭を下げる紅に対し、唯はひとつの質問を問いかける。

「お前は、友達とはなんだと思う？」

「…唐突ですね。もしかして昨日、私の部屋の前にいたりとかしましたか？」

冷静を保っているつもりだが、紅の頭の中には明らかに焦りがあった。

「いや、あの後は仕事があったからな。特に部屋に近づいてはないが…、聞かれてまずいことでもあったか？」

唯はコーヒーを飲みながら、紅の様子を伺う。

「そうですか。いや、母と電話してたものですから。気にしないで下さい」

「……で？」

「えっ？」

「だから質問の答え」

唯は頬杖をかきながらカップの中のコーヒーをかき混ぜ、話を進める。

「そうですね…」

紅は考える素振りを見せた後、

「脆くて儂いもの…ですかね」

「本心か？」

紅の答えと重なるように唯は言い放ったが、椅子の倒れる音で半分遮られる形となった。

「本心ですよっ！！だってそうじゃないですかっ！！友達なんて崩れやすいもの！！唯さんだって…誰だって思ってますよ！！！」

はあはあと息を切らせながら、傍に置いてあった水を飲み干し、深呼吸をしてから話を続けた。

「…私は、間違ったこと、言ってますか？」

唯は頭を少しかいてから溜め息混じりに、

「いや、正しくないわけじゃない…というより、正しい選択肢なんてないんだよ」

カップの中に入ってるコーヒーを飲み干し、椅子を回転させてから続ける。

「私も神月の答えが正しいと思うこともあるが、友達ってそんなに脆くて簡単なものか？」

「正しい選択肢がないなら、脆いって考えはありえないんですか？」

紅の率直な感想に、唯は息を吐いてから

「お前の考えを否定してるわけじゃない」

「だって私はっ…」

「脆いかどうかは人によるが、私は友達も家族も仲間も同じくらい大切に思っているぞ」

一瞬の間が空く。

紅はこの答えが自分の予想の範疇を超えていた為か、自分も同じように思っていたからなのか、どうしても答えることが出来なかった。
「もちろん…お前も同じくらい大切な友達だ」

紅は我に返り、

「そんなの、理由にならないじゃないですかっ!!」

そして手に持っていたグラスを床に落とした。

「…お前が私を頼りにしてくれた。それだけで十分だろ？」

「——ッ!!」

ガチャッ

「たっだいま——っつとと、危ない、紅ちゃん危ないよっ!!」

まいがドアを思い切り開いたところを紅は瞬時にかわしたのだが、入ってきたまいと衝突した。

「お前が危ねえよ」

隼人はまいの頭を軽く叩き、ソファに腰掛ける。

「ていうか、あんまり買い食いしないでくださいよ」

「あっ!そういうば、唯ちゃんの好きな林檎が売ってたのを買ってきたんだあ」

総悟の言葉を見殺して、話を続けようとまいが口を開いた瞬間…

「あ、あのっ!!」

沈黙。紅は下を俯きながら、語る。

「ごめんなさい。私、皆さんを騙してて…。本当は私…、ある人物から頼まれてここに来たんです」

「…なにを頼まれて？」

リリーが問うと、紅は唾を飲み込み、青ざめた表情で

「“便利屋を騙して情報を得る”って、そう言われてここに来ました」

しばらくの間——、間、間、——…。

(こんなことを考えるのはあいつくらいだな)

「その、“便利屋を騙して情報を得る”と言ってきたのは…なんて名前の奴だ？」

唯の読みにも気づかず、紅は答える。

「殺し屋管理・情報部門、星奈魅嘉さんです」

リリーは脂汗を流しながら、紅に「話し…、続けてもらっていいかな？」と言い、机の上にある書類を読み漁る。

「…最初はそれを受け入れてここに来ました。でも、でも唯さんが、皆さんが優しくしてくれたから」

潤んだ表情で、唯達の方を向き、

「私にはそんなこと…、できません」

話が終えた紅の顔を見て唯はニイと笑う。

「…よく言ったな、もういいぞ」

コートで羽織りながら席を立ち、部屋の扉を開けた。

「え。…え？」

「行くぞ、仕事だ」

紅は意味が分からず頭にクエスチョンマークを浮かべながら首を傾げる。そんな紅に対し、まいが肩をポンポンと叩き、話しかける。

「あははっ ほら、紅ちゃんの依頼がまだ終わってないでしょー？」

「確かにそうですね…、でも騙してたからそれは無かったことになるんじゃない」

まいと紅のやり取りを聞き、唯は「依頼は依頼だ」と言った後、呟くように「大事なことも聞けたしな」と付け足した。

「それに」

「私は仲間を助けられないほど落ちぶれてもないぞ」

「あ、の…」

「おい。全員月光ピンは持ったほうがいい」

紅は唯に言葉をかけようとしたが、隼人の言葉で遮られる形となった。

「あははっ、なんでー？別に戦うわけじゃないのにい」

まいは隼人をからいかいながら辺りを見回す。

「えっと…、月光ピンってなんですか？」

紅の問いに対し「あー、その話もしてなかったか」と唯は頭を掻きながら呟き、説明をしようと口を開いた瞬間、門前に人影があるのに気づく。全員が構えるとその影は動き出し、唯達の目の前に現れた。

「見つけたぞ、神月紅」

長い黒髪を靡かせながら歩み寄ってくる少女の手には一本の刀が握られ、全員が戦闘体制に入ったところで空気の読まない言葉が浴びせられる。

「えー…っと、誰だっけ？」

緊迫な雰囲気をぶち壊したのは、頬をぼりぼりと掻きながら申し訳なさそうに呟くまいだった。隼人が溜め息混じりに突っ込もうと口を開いた瞬間――、

ドゴオッ

轟音。

固いものが碎ける音。コンクリートが引裂かれる音。

先に立つ黒髪の少女は眉間にしわを寄せ、頬を引きつらせながら唯達の方を向き、口を開く。

「星影部隊隊長、木ノ下玲だ！！魅嘉様の命で、お前らを潰しに来た！！」

宣戦布告。

そして魅嘉という名前を聞き、紅は肩を震わせながらひとつの言葉を口にした。

「ごめんなさい。…ごめんなさい、唯さん」

ハジメマシテ？

「で。実際は何が目的だったんですか？魅嘉さん」

少年……天草湊は眼前の女に問いかける。

「んー。まあ、気が変わったのよね、正直。」

静けさの漂う会話のやり取りに、第三者の声が室内に響き渡る。

「魅嘉さんってあれですよー。要領よく色々企てて、関係のない他者を利用するような悪女みたいな人ですよー。いや、悪女って古い言い方をすると醜い女性って意味らしいから悪魔の方がいいのかな？」

「殺されたいのかしら？杏奈ちゃん」

ニコニコと笑いながら、殺気を込めた言葉をかける魅嘉。

杏奈と呼ばれた少女の手には、先日魅嘉に向けたものよりも紅く染め上げられたナイフが握られていた。

魅嘉はそんな杏奈を横目で睨みながら、今回の紅の「逃亡」について頭の中で整理した。

吉岡杏奈はグロテスクなものが大好きだ。

まだ4歳にも満たない幼少時代の彼女は、ある種の週刊誌に載っていたモノクロの小さな写真。事故で亡くなった人間の死体を写したものを見るのが好きだった。両親が事故で亡くなった時も、まるで可愛い子猫を見るかのような表情で死体を眺めた。小学校の委員会では怪我に最も近い存在にあたる保険委員に入り、先生の横で生傷を観察し続けた。そんな彼女の異常さに気づいた魅嘉は、殺し屋に勧誘し、部隊に加入させた。死体を山ほど見れるというメリットを

付け加えて。

彼女はグロテスクでドロドロしたものが大好きだ。別に血が溢れていなくとも、人間関係のドロドロしたものを見るのも好きであったし、魅嘉の仕事にはいつもそのような内容ばかりなので殺し屋という仕事に憧れさえもあった。

そんな彼女の弟子にあたるのが神月紅という少女だった。

殺し屋には個性溢れるアブノーマルなメンバーばかりが揃っているのだが、それでも杏奈だけは理性を保っていたため、まだまともな人間であることに変わりはない。だから魅嘉は殺しの経験のない紅を弟子として杏奈に預けた。

だがそれは誤算だった。

理性あるということと、殺しの経験のあるということばかりに気を取られ、魅嘉は杏奈の本性に気づくことができなかった。吉岡杏奈はただグロテスクでドロドロなことが好きなわけではない。ただ純粹に、心が黒く染め上げられているだけなのだ。紅という無垢で無知な少女を操りただけなのだ。何も知らない少女に、世の中の黒く染まった大人達の考えを、行動を、ただただ教えてやりたかっただけなのだ。

それが魅嘉の計画に反したとしても。

今回の紅の逃亡については、すべて杏奈の策略で行われたことだった。杏奈の口車に乗せられ、まんまと引っかかってしまった紅は、便利屋に向かった。何よりも最悪だったのは、今回の件については全ての元凶は杏奈にあったはずが、紅の口から杏奈の名前が出てくることは無かった。それも、まったく無縁の魅嘉の名前を告げられる形で。

幸いだったのは、魅嘉と紅が違う形で繋がっていたことと、天草湊が杏奈の不審な行動にすぐさま気付き、魅嘉に伝えることで魅嘉の耳に杏奈の情報が入り、すぐに対処することができたことだった。紅を便利屋へ向かうように仕向けた杏奈は、会議室で魅嘉に叱られる羽目になったのだが、当の本人は

「え？だって、前の関係よりも今の関係の方がずっとく素敵でしょ？」

と、反省の欠片もなかったのだった。

——吉岡杏奈、これはこれで何を考えてる子なのか未だに分からないとこだけど。せっかくだし、最後までゲームに参加してもらおうかしら。利用価値は高ければ高いほどうまく作用するしね。

魅嘉がそんなことを考えていると、杏奈が満面の笑みでひとつの言葉を紡ぎだした。

「魅嘉さんって頭いいでしょ？あたしね、考えたの！昨日叱られてから、反省して、それで、あたしが考えてることと魅嘉さんが企てることを真逆にしようって考えたの！だからね？ごめんなさい、紅ちゃんには便利屋で働いてもらうことにしたんだあ！」

笑顔でとんでもないことをさりと口にする杏奈に対し、見かねた湊が溜め息混じりに呟いた。

「お前さあ、少しは反省した方がいいんじゃないか？」

「えーッ！反省してるよ？しまくってるよ、これ以上ないほどに！ねえ、魅嘉さ…ってあれ？魅嘉さんどこ行った？」

気づいた湊も、先程まで魅嘉が座っていた椅子に目をやる。そんな湊を見ながら杏奈はケラケラと笑い、

「あーあ、もう行っちゃったかあー。早いなあ…って、魅嘉さんって体育会系だったっけ？足早ッ！ボルト？ボルト？うわあ、いかッーッ！」

ケラケラと笑いながら話す杏奈を見て、湊が語りかける。

「そついや、魅嘉さんはなんで玲ちゃんを送り出したんだ？」

湊の疑問を、杏奈は笑いながら答える。

「湊君って高校3年生のくせして、なんにも分かってないよね。今まで勉強とかしてきた？あぁ、殺し屋なんかやってるくらいだから仕事に甘えて勉強なんかしてこなかっただろうね。あははっ、簡単だよー。あたしが紅ちゃんを便利屋に向かわせたでしょ？それで、魅嘉さんは隊長である玲ちゃんを送り出して、連れて来させるようにしたんだよう。まあ、表向きは便利屋を潰すってことらしいけど」

「あたしが紅ちゃんを便利屋に所属できるようにうまく仕向けたから意味無いんだけどね」

*

「…神月？」

唯が眉を顰めると、紅が俯きながら話し始めた。

「私、本当は便利屋の皆さんを騙して、それで、あの、私が便利屋に入れば魅嘉さんが喜ぶからって、そう言われて…。でも、そのためには何かをきっかけにしなくちゃ近づけないからって、それで、ここまでのシナリオを作ってもらって…、でもそれだけじゃ魅嘉さんにこのことを気づかれるからって」

そこまで聞いたところで、唯は殺し屋の一人の顔を思い浮かべる。

「それで、玲さんがここに迎えに来るから、自分のことを話して同情してもらえば、唯さん達が助けてくれるからって。“そしたらあなたは便利屋になれるから”って。」

「なッ、そんなこと…そんなことを魅嘉様が言うわけがないだろう

！」

玲が動揺を隠しきれず、刃を紅に向ける。

「吉岡杏奈」

「…は？」

「だから、そんなことを指示したのは吉岡杏奈だろって話し」

唯の説明に納得がいったのか、玲とは対照的に隼人が溜め息混じりに「まんまと嵌められたってことかよ」と呟いた。

「まあ、だからと言って依頼人の神月を見捨てるようなことはしないし、第一、神月はもうひとつ理由があってここまで来たんだろ？」
唯の問いに対し、紅は涙で目を潤ませながら言葉を紡ぎ出す。

「私、昔から組織とかそうゆうのに憧れてたんです。ずっと、独りだったから。だから、魅嘉さんに誘われたときに、私も入れるってことが何よりも嬉しくて入ったんです。でも、それはただの自己満足で、殺し屋という組織に甘えていただけな気がしたんです。だから、便利屋の皆さんに優しくされて、友達と…仲間と呼んでくれて正直嬉しかったんです。それで…——」

「もういい！！」

話を遮るように、今までの彼女からは想像できないような大声が響いた。

「殺し屋に無駄な感情はいらない！言われた通りに動けばいい！何が友達だ！何が仲間だ！甘ったれるのもいい加減にしろ！！！」

ゴツツ

油断していた唯の腹部に、玲の蹴りが叩き込まれる。

「唯さん！！」

「武器が無ければ相手にならないな」

息を切らせながら玲が呟くと、唯が飛ばされたところから銃が発砲される音が響き――

刹那。

玲の肩に、先程まで無かったはずの切り傷が出来ていた。

「…え？」

傷口に気を取られていると、飛ばされたはずの唯が、玲の頭を回し蹴りで蹴り飛ばす。

「武器が無ければ戦えない？馬鹿にするなよ、そんなので便利屋をやってられるか」

衝撃。衝撃。衝撃。背中と頭に強い痛みが走る。

「く…そっ…！！こんなの報告されてないぞ」

まるで負け犬が吐くような台詞を呟き、立て直そうとした瞬間――、

『玲ちゃん、もういいよ』

耳に付けていた小型通信機から、魅嘉の声が頭に響く。

「あ…、え？」

『だから、もう帰って来てってこと』

「しかしっ…！」

『これ以上やると、あたしの沽券に関わるのよ』

怒気のこもった一言が玲の身体を震わせる。

「…分かりました」

ブツッ

通信機が切れたのを確認すると、立ち上がり歩を進める。唯達が構えると、玲は片手を挙げ、一言「もういい」と呟いた。

「え、玲さ…」

「仕事が入った。こんなくだらない茶番に付き合ってられるか」

紅の言葉を無視し、最後に

「次に会った時は殺すからな」

そう言い残し、傷口を押さえながら去って行った。

（そういえば、さっきの攻撃、銃の発砲音が鳴ったのに切り傷って…、なんなんだ？）

疑問には思ったが、特には深く考えることはなかった。そして、近くにもう一人殺し屋がいることに玲はまったく気づくことが出来なかった。

*

「むかつくむかつくむっかつく——っ！！！！！」

「どいつもこいつもあたしの計画ボロボロにしゃがって、ふざけんなー！ ツツ！ ！」

耳をつんざくような喚き声。

星奈魅嘉は、顔を真つ赤にしながらくちやくちやになつた携帯を投げ捨て、踏みつける。

⌈
P
P
P
P
⌋

「ん？なに？…あー、今あたしさ、めっちゃむかつくことがあってイライラしてんのよ。あとでにしてちょうだい」

「便利屋、吉岡杏奈、邪魔してくれたお仕置きはきっちりしなくちやね」

*

「おい、剥がしたら意味ねえだろ」「…お前の付け方が悪いと思う」「そうだよーう、はやっちつて不器用だね」「ツんのやろー…！」「あー、はいはい。もういいから、五月蠅いよさつきから」「絆創膏とシップを貼るだけで、一体何十分かけんのよ」「はやっちが悪いんだよー？照れて貼るの遅いから」「照れてねえッ！」「もういいから早く貼れ」「お前、自分で貼れよ…」「頼まれたことはなんでもやる、それが便利屋でいッ」「お前はもう黙ってる…！」賑やかに会話を続ける唯達とは対照的に、ソファに体育座りでうずくまる紅。

「大丈夫ですよ、誰も気にしてませんから」

テーブルに紅茶の注がれたティーカップを置き、紅に話しかける総悟。

「ごめ、ごめんなさい…」

震える声で謝る紅に、総悟は一瞬驚きながら話し続ける。

「あの、さ。別に今回の件で皆が紅ちゃんを怨んでるわけじゃないし、気にしなくていいんですよ？」

「でも…」

ずいっ

「！？」

「私達はもう気にしてない、だからお前も気にするな」

唯が紅の顔を覗き込み、呆れ顔で呟く。

「でも騙したことに変わりないし…」

「もーっ！紅ちゃんったら気にしすぎだよ！！そんなこと言ったら、わたしだってはやっちの部屋に勝手に入って色々盗んだことが計144回もあるのに…！」

「てめッ、人の部屋に入って何してんだよ…！」

「427（死にな）になるまでやるんだあ」

紅の悩みを打ち消すように、まいが自分のしてきたことを話し出す。

「ほら、誰も気にしてないでしょう？」

総悟の言葉に紅は顔を上げ、そして

「私なんかが便利屋にいてもいいんですか…？」

「全然いいよー」

「賑やかになりそうね」

「勝手にしろ」

「よろしく願いしますね、先輩」

「神月紅」

「は、はいっ！」

「あらためて——…」

「ようこそ、便利屋へ」

ハジメマシテ？（後書き）

- あーッガキ -

やっと2話である程度まとまりました。笑
アクセス数も増えてきて、嬉しい限りです（ノωノ）

挿絵注文もありましたので

暇があれば描いていきたいと思っております。もふっ

では

引き続き「月神」宜しくお願いします（*´ω`*）

感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3649v/>

月神

2011年10月9日13時26分発行